

開水路の不定流を特性曲線を用いて数値計算する方法は、原理的には目新しいものではない。しかし、従来の解法はもっぱら一様断面水路にかぎられているようであり、とくに特性曲線それ自体の追跡を目的としない場合には、固定格子点による数値計算法の方がより実際であることなどのため、特性曲線の計算法に対する検討はなお十分でないように思われる。本文は高速度電子計算機を開水路不定流の研究に活用する緒口として、水路断面形および水路床勾配の変化の影響も含めた特性曲線の数値計算について考察したものである。

1. 基礎方程式

鉛直方向の加速度を無視できるような流れを対象とし、横からの流出入もなく、水路断面積 A が水深 h に対して、

$$A = ah^m \quad \dots\dots\dots (1)$$

であらわせるものとする。ただし、係数 a は流下方向の距離 x の関数とし、指数 m は常数とする。

この水路における流れの連続方程式および運動量方程式は慣用の文字を用いてそれぞれ

$$\frac{\partial h}{\partial t} + u \frac{\partial h}{\partial x} + \frac{h}{m} \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{uh}{m} \frac{1}{a} \frac{da}{dx} = 0 \quad \dots\dots\dots (2)$$

$$(1-\alpha) \frac{mu}{h} \frac{\partial h}{\partial t} + g \frac{\partial h}{\partial x} + \frac{\partial u}{\partial t} + \alpha u \frac{\partial u}{\partial x} - g \sin \theta + \frac{r_0}{\rho R} + u^2 \frac{\partial \alpha}{\partial x} = 0 \quad \dots\dots\dots (3)$$

と書きあらわされる。運動量の補正係数 α は厳密には u , h , a , m などの関数であるが、その性質は明らかでなく、通常の水路では 1 に近い値をとると考えられるから、(3)式において、 $(1-\alpha)$ および $\partial \alpha / \partial x$ を含む項をまとめて β とおいておくと、

$$g \frac{\partial h}{\partial x} + \frac{\partial u}{\partial t} + u \frac{\partial u}{\partial x} - g \sin \theta + \frac{r_0}{\rho R} + \beta = 0 \quad \dots\dots\dots (4)$$

となる。(3)式および(4)式は双曲線型の2元1階連立偏微分方程式であって、その特性曲線は、水深 h を波速 $c = \sqrt{gh/m}$ $\dots\dots\dots (5)$

でおきかえて、次式で与えられる。

$$\text{正特性曲線} : \frac{dx}{dt} = u + c \quad \dots\dots\dots (6) \quad \frac{du}{dt} + 2m \frac{dc}{dt} = g(S - S_f - S_a) \quad \dots\dots\dots (7)$$

$$\text{負特性曲線} : \frac{dx}{dt} = u - c \quad \dots\dots\dots (8) \quad \frac{du}{dt} - 2m \frac{dc}{dt} = g(S - S_f + S_a) \quad \dots\dots\dots (9)$$

$$\text{ここに,} \quad S = \sin \theta, \quad S_f = \frac{r_0}{\rho g R} + \beta = \frac{n^2 u^2}{R M^{1/2}}, \quad S_a = \frac{uc}{g} \frac{1}{a} \frac{da}{dx} \quad \dots\dots\dots (10)$$

とおく。

いわゆる摩擦勾配は $r_0/\rho g R$ であって、それを Manning の粗度係数 n を用いて $n^2 u^2 / R^{4/3}$ とあらわすのが定法であるが、ここではさらに β の項も含めて S_f を定義する。しかし、 β の性質はよく分っていないから、 R の指数 M は便宜的に $8/3$ を採用し、 β の影響は n の中に含まれると解釈する。また巾広い水路では潤辺長を水路巾で近似できるから、 $R = h/m = c^2/g$ とおき、

$$S_f = gn^2 u^2 / c^M \quad (M = 8/3) \quad \text{とする。}$$

2. 基礎方程式の無次元化と差分による近似

特性曲線は(6)～(9)式で与えられるが、数値計算にあたって諸量をあらかじめ無次元化しておけば、種々の条件のもとにおける計算結果、あるいは計算精度を比較検討するのに便利である。いま常数 x_0, t_0, u_0, c_0 , および S_0 を次の関係式

$$c_0 = u_0 = g S_0 t_0, \quad \text{および} \quad x_0 = c_0 t_0 = g S_0 t_0, \quad \dots\dots\dots 01$$

を満足するように選び、 x, t, u, c に代わる無次元量 X, T, U, C を定義すれば、

$$X = x/x_0, \quad T = t/t_0, \quad U = u/u_0, \quad C = c/c_0.$$

$x - t$ 平面における特性曲線の方程式(6)～(9)式は、 $X - T$ 平面に対して、

$$\frac{dX}{dT} = U \pm C \quad \dots\dots\dots 02, \quad \frac{dU}{dT} \pm 2m \frac{dC}{dT} = I - K_f \mp K_a \quad \dots\dots\dots 03$$

$$\left. \begin{aligned} \text{となる。ここに,} \quad I = S/S_0, \quad K_f = S_f/S_0 = N U^2 C^{-M}, \quad K_a = S_a/S_0 = E U C \\ \text{さらに,} \quad N = g n^2 c_0^{(2-M)} S_0^{-1}, \quad E = c_0^2 g^{-1} a^{-1} (da/dx) \end{aligned} \right\} \quad \dots\dots\dots 04$$

である。水路床勾配 S および断面形の変化をあらわす $a^{-1} (da/dx)$ はいずれも距離 x のみの既知関数である。 N については多分に不確定要素を残しているが、とりあえずは、時間的な変化に対して平均値で満足することにして、これもまた x のみの関数として与えることにする。なお02, 03式中の複符号は、上の符号が正特性曲線を、下の符号が負特性曲線をあらわしている。以下計算過程における複符号も同様である。

さて、02式および03式を ΔT について展開すれば、Taylor の定理から、

$$\begin{aligned} \Delta X &= (U \pm C) \Delta T + \frac{1}{2!} \left(\frac{dU}{dT} \pm \frac{dC}{dT} \right) \Delta T^2 + \frac{1}{3!} \left(\frac{d^2U}{dT^2} \pm \frac{d^2C}{dT^2} \right) \Delta T^3 + \dots\dots\dots \\ \Delta U \pm 2m \Delta C &= (I - K_f \mp K_a) \Delta T + \frac{1}{2!} \frac{d}{dT} (I - K_f \mp K_a) \Delta T^2 + \dots\dots\dots \end{aligned}$$

ここに差分記号は前進差分をとる。上式をさらに ΔT^3 の項までの差分をとれば、

$$\Delta X = (U \pm C) \Delta T + \frac{1}{2} (\Delta U \pm \Delta C) \Delta T - \frac{1}{12} \left(\frac{d^2U}{dT^2} \pm \frac{d^2C}{dT^2} \right) \Delta T^3 + \dots\dots\dots 05$$

$$\begin{aligned} \Delta U \pm 2m \Delta C &= (Y_{\pm}) \Delta T + \frac{1}{2} \left[(Z_{\pm}) (U \pm C) \Delta T - \left(2 \frac{\Delta U}{U} - M \frac{\Delta C}{C} \right) K_f \mp \left(\frac{\Delta U}{U} + \frac{\Delta C}{C} \right) K_a \right] \Delta T \quad \dots\dots 06 \\ &+ \left[\frac{d^2}{dT^2} (Y_{\pm}) + \frac{1}{2} \left(\frac{2}{U} \frac{d^2U}{dT^2} - \frac{M}{C} \frac{d^2C}{dT^2} \right) K_f \pm \left(\frac{1}{U} \frac{d^2U}{dT^2} + \frac{1}{C} \frac{d^2C}{dT^2} \right) K_a \right] \Delta T^3 + \end{aligned}$$

ここに、

$$Y_{\pm} = I - K_f \mp K_a, \quad Z_{\pm} = \dot{I} - K_f \frac{\dot{N}}{N} \mp K_a \frac{\dot{E}}{E} \quad \dots\dots\dots 07$$

3. 初期特性曲線

初期条件としては、流量一定として与えられるのが普通である。流量 Q と無次元変数 U, C との関係は、

$$Q = Q_0 U C^m, \quad \text{ここに} \quad Q_0 = a (m c_0^2 / g)^m c_0. \quad \dots\dots\dots 08$$

したがって、流量一定の条件は $dQ = 0$, すなわち

$$dU = -2m (U/C) dC, \quad \text{あるいは} \quad dC = -(C/2mU) dU \quad \dots\dots\dots 09$$

となる。この条件を02, 03式に代入すれば、初期特性曲線方程式が得られる。

$$dX/dT = U \pm C, \quad dU/dT = (Y_{\pm}) U / (U \mp C), \quad dC/dT = -(Y_{\pm}) C / 2m (U \mp C) \quad \dots\dots\dots 09$$

ただし、 $U/C \approx 1$ の場合は除外する。

⑧式から、適当な差分 ΔT を選べば、

$$\Delta X = (U \pm 1) \Delta T + \frac{1}{4m} \frac{2mU \pm C}{U \mp C} (Y_{\pm}) \Delta T^2 + \frac{1}{12m} \left\{ \frac{2mU \pm C}{U \mp C} \frac{d}{dT} (Y_{\pm}) \mp \frac{4m^2 - 1}{4m} \frac{UC^2}{(U \mp C)^2} (Y_{\pm})^2 \right\} \Delta T^3 + \dots \quad (20)$$

$$\Delta U = \frac{U}{U \mp C} \left[(Y_{\pm}) \Delta T + \frac{1}{2} \left\{ (Z_{\pm}) (U \pm C) - \frac{C}{2m(U \mp C)} (\overline{4m + M K_f \pm 2m - 1 K_a}) (Y_{\pm}) \right. \right. \\ \left. \left. - \frac{2m + 1}{2m} \frac{C^2}{(U \mp C)^2} (Y_{\pm})^2 \right\} \Delta T^2 + \dots \right] \quad (21)$$

$$\Delta C = \frac{-C}{2m(U \mp C)} \left[(Y_{\pm}) \Delta T + \frac{1}{2} \left\{ (Z_{\pm}) (U \pm C) - \frac{C}{2m(U \mp C)} (\overline{4m + M K_f \pm 2m - 1 K_a}) (Y_{\pm}) \right. \right. \\ \left. \left. - \frac{2m + 1}{2m} \frac{UC}{(U \mp C)^2} (Y_{\pm})^2 \right\} \Delta T^2 + \dots \right] \quad (22)$$

初期特性曲線については、さらに高次の差分表示が可能であるが、任意の特性曲線網については、 ΔT^2 の項までであるから、上式の ΔT^3 の項は、採用した差分 ΔT が適当であるかどうかの検証に用いる。

4. 特性曲線網

特性曲線群の第 i 番目の正特性曲線を $[i]$ 曲線、第 j 番目の負特性曲線を $[j]$ 曲線と呼称し、それらの交点を点 (i, j) と名付ける。そして、点 (i, j) から $[i]$ 曲線および $[j]$ 曲線に沿ってとった差分をそれぞれ Δi および Δj の差分記号であらわすことにする。

(1) 境界条件が与えられる $X = X_B$ における特性曲線網の算式：

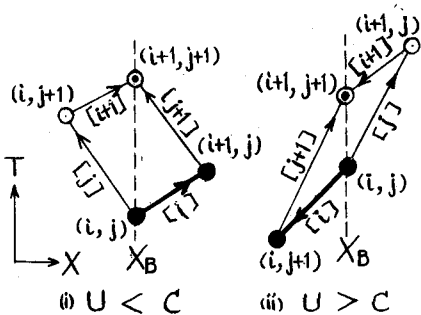


図-1 $X = X_B$ を横切る網目

$U < C$ ，すなわち常流の場合と、 $U > C$ ，すなわち射流の場合とでは負特性曲線の勾配が逆になるから、 $X = X_B$ における特性曲線の一つの網目は、図-1に例示するようになる。図において、黒点および太線は波が上流から下流へ進む場合に初期条件から既知となる点および線をあらわし、矢印はそれぞれの網目に沿う差分の方向を示す。 $U < C$ の場合には、下流から上流へ遡る波が存在し、その波を対象とするときは、 $[i]$ 曲線ではなくて、 $[j]$ 曲線、したがって点 $(i+1, j)$ が与えられる。

まず、 $X = X_B$ において、境界条件が、 $C_B = C(T)$ で与えられる場合をとりあげよう。

$[j+1]$ 曲線に関する差分方程式⑧および⑨式は、 ΔT^3 以下の項を省略して、

$$\Delta_{j+1} X = \{ (U - C) - (\Delta_1 U - \Delta_1 C) \} \Delta_{j+1} T + \frac{1}{2} \{ (\Delta_{j+1} U - \Delta_{j+1} C) \Delta_{j+1} T \dots \quad (23)$$

$$\Delta_{j+1} U - 2m \Delta_{j+1} C = \{ (Y_-) + (\Delta_1 Y_-) \} \Delta_{j+1} T + \frac{1}{2} \{ \{ (Z_-) + (\Delta_1 Z_-) \} \{ (U - C) + (\Delta_1 U - \Delta_1 C) \} \Delta_{j+1} T \dots \quad (24)$$

$$- \frac{\Delta_{j+1} U}{U + \Delta_1 U} (2 K_f - K_a + 2 \Delta_1 K_f - \Delta_1 K_a) + \frac{\Delta_{j+1} C}{U + \Delta_1 U} (M K_f + K_a + M \Delta_1 K_f + \Delta_1 K_a) \} \Delta_{j+1} T$$

ここに、 U ， C ， $(Y_{\pm})$ ， $(Z_{\pm})$ はすべて点 (i, j) における値である。いま $X = X_B$ 上の差分を Δ_B であらわせば、 $\Delta_{j+1} = \Delta_B - \Delta_1 \dots \quad (25)$

であって、 $\Delta_{j+1} X = -\Delta_1 X$ ， $\Delta_{j+1} T = \Delta_B T - \Delta_1 T$ ， $\Delta_{j+1} U = \Delta_B U - \Delta_1 U$ ， $\Delta_{j+1} C = \Delta_B C - \Delta_1 C$ であるから、既知の $[i]$ 曲線上の関係式を考慮して②③、②④式を整頓し、さらに ΔT^3 の項を省略すれば、

$$\begin{aligned} \{ (U-C) + \frac{1}{2} (d_1 U - d_1 C) + \frac{1}{2} (d_B U - d_B C) \} d_B T &= \{ -2C - d_1 C + \frac{1}{2} (d_B U - d_B C) \} d_1 T \quad \dots\dots\dots 60 \\ d_B U - 2m d_B C &= -4m d_1 C + \{ (Y_+) - (Y_-) \} d_1 T + (Z_-) d_B T + \frac{1}{2} \{ (Z_-) \{ (U+C) d_1 T + (U-C) (d_B T - d_1 T) \} (d_B T - d_1 T) \\ &+ (Z_+) (U+C) d_1 T^2 - \{ \frac{d_B U}{U} (2K_f - K_a) - \frac{d_B C}{C} (MK_f + K_a) \} (d_B T - d_1 T) - \frac{d_1 U}{U} \{ 2K_f d_B T - K_a (d_B T - 2d_1 T) \} \\ &+ \frac{d_1 C}{C} \{ MK_f d_B T + K_a (d_B T - 2d_1 T) \} \} \quad \dots\dots\dots 61 \end{aligned}$$

が導かれる。一方境界条件 $C_B = C(T)$ から、点 (i, j) における $dC/dT, d^2C/dT^2$ を $\dot{C}, \ddot{C}$ であらわして、

$$d_B C = d_B T \dot{C} + \frac{1}{2} d_B T^2 \ddot{C} \quad \dots\dots\dots 62$$

が与えられる。60, 61および62式を $d_B T, d_B U, d_B C$ について解けばよいわけであるが、 $d_1 T$ のorderが省略できるという前提にたてば、これらを $d_1 T$ と $d_1 T^2$ の項に分けて、

$$d_B T = d_B' T + d_B'' T, \quad d_B C = d_B' C + d_B'' C, \quad \text{および} \quad d_B U = d_B' U + d_B'' U \quad \dots\dots\dots 63$$

とおき、第1近似 d_B' を、

$$d_B' T = \{ -2C/(U-C) \} d_1 T, \quad d_B' C = d_B' T \dot{C}, \quad d_B' U = 2m (d_B' C - 2d_1 C) + (Y_-) d_B' T + \{ (Y_+) - (Y_-) \} d_1 T \quad \dots\dots\dots 64$$

第2近似 d_B'' を

$$d_B'' T = \frac{C}{(U-C)^2} \{ d_1 U - \frac{U}{C} d_1 C + \frac{1}{2} (\frac{U}{C} + 1) (d_B' U - d_B' C) \} d_1 T, \quad \dots\dots\dots 65$$

$$d_B'' C = d_B' T \ddot{C} + \frac{1}{2} (d_B' T)^2 \ddot{C} \quad \dots\dots\dots 66$$

$$\begin{aligned} d_B'' U &= 2m d_B'' C + (Y_-) d_B'' T + \frac{1}{2} \{ \{ (Z_-) (U+C) - (Z_+) (U+C) \} d_1 T - \frac{d_B' U}{U} (2K_f - K_a) + \frac{d_B' C}{C} (MK_f + K_a) \\ &- \{ \frac{d_1 U}{U} (2K_f - \frac{U}{C} K_a) - \frac{d_1 C}{C} (MK_f + \frac{U}{C} K_a) \} \frac{2C}{U+C} \} (-\frac{U+C}{U-C} d_1 T) \quad \dots\dots\dots 67 \end{aligned}$$

とできよう。これによって点 $(i+1, j+1)$ が既知点となり、 $[i+1]$ 曲線の出発点が得られたことになる。

なお点 $(i+1, j)$ の側から別の地点の境界条件によって計算が進められて来る場合や、常流に生ずる負の波を対象とする場合には、 $[j]$ 曲線が既知として与えられるから、全く同様の手順で $X = X_B$ 上の点 $(i+1, j+1)$ を決定する算式が導かれる。その結果だけを示すと次式のようなのである。

$$\left. \begin{aligned} d_B' T &= (2C/U+C) d_3 T, \quad d_B' C = d_B' T \dot{C}, \quad d_B' U = -2m (d_B' C - 2d_3 C) + (Y_+) d_B' T + \{ (Y_-) - (Y_+) \} d_3 T \\ d_B'' T &= \frac{C}{(U+C)^2} \{ -d_3 U + \frac{U}{C} d_3 C + \frac{1}{2} (\frac{U}{C} - 1) (d_B' U + d_B' C) \}, \quad d_B'' C = d_B' T \ddot{C} + \frac{1}{2} (d_B' T)^2 \ddot{C} \\ d_B'' U &= -2m d_B'' C + (Y_+) d_B'' T + \frac{1}{2} \{ \{ (Z_+) (U-C) - (Z_-) (U+C) \} d_3 T - \frac{d_B' U}{U} (2K_f + K_a) \\ &+ \frac{d_B' C}{C} (MK_f - K_a) + \{ \frac{d_3 U}{U} (2K_f - \frac{U}{C} K_a) - \frac{d_3 C}{C} (MK_f + \frac{U}{C} K_a) \} \frac{2C}{U+C} \} (-\frac{U-C}{U+C} d_3 T \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots 68$$

同様に、 $X = X_B$ において、 C_B および U_B がともに T の関数として与えられるときは、 $X = X_B$ 上の各点を出発点として特性曲線網を作成できる。この場合は d_3 および d_{3+1} が求める未知量であり、その算式は

$$\left. \begin{aligned} d_3' T &= \frac{U+C}{2C} d_B T, \quad d_3' U = \frac{1}{2} [d_B U + 2m d_B C + \{ (Y_+) (U-C) + (Y_-) (U+C) \} (d_B T/2C)] \\ d_3' C &= \frac{1}{4m} [d_B U + 2m d_B C + \{ (Y_+) (U-C) - (Y_-) (U+C) \} (d_B T/2C)] \\ d_3'' T &= \frac{1}{4C} \{ \frac{U-C}{2C} (d_B U + d_B C) + d_3' U - \frac{U}{C} d_3' C \} d_B T \\ d_3'' U &= \frac{1}{2} \{ (Y_+) d_{1+1}'' T + (Y_-) d_3'' T \} + \frac{1}{4} \{ \{ (Z_+) (U-C) + (Z_-) (U+C) \} \frac{U^2 - C^2}{4C^2} d_B T \\ &- \{ \frac{d_B U}{U} (2K_f + K_a) - \frac{d_B C}{C} (MK_f - K_a) \} \frac{U-C}{2C} - \{ \frac{d_3 U}{U} (2 \frac{U}{C} K_f - K_a) - \frac{d_3 C}{C} (M \frac{U}{C} K_f + K_a) \} \} d_B T \\ d_3'' C &= \frac{1}{4m} \{ (Y_+) d_{1+1}'' T - (Y_-) d_3'' T \} + \frac{1}{8m} \{ \{ (Z_+) (U-C) + (Z_-) (U+C) \} \frac{U^2 - C^2}{4C^2} d_B T - \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots 69$$

$$- \left\{ \frac{d_{BU}}{U} (2K_f + K_a) - \frac{d_{BC}}{C} (MK_f - K_a) \right\} \frac{U-C}{2C} + \left\{ \frac{d_{JU}}{U} (2K_f - \frac{U}{C} K_a) - \frac{d_{JC}}{C} (MK_f + \frac{U}{C} K_a) \right\} d_{BT} \Bigg]$$

また [i+1] 曲線については、

$$d_{i+1}X = d_jX, \quad d_{i+1}T = d_jT - d_{BT}, \quad d_{i+1}U = d_jU - d_{BU}, \quad d_{i+1}C = d_jC - d_{BC} \quad \dots\dots\dots (30)$$

ただし、この場合には正負いずれの特性曲線も、 $X = X_B$ 上から出発すると考えるから、差分の方向は、[i+1] 曲線について、図-1の矢印と反対方向をとる。

(2) 既知の正および負特性曲線 [i] および [j] から特性曲線網を完成する算式：

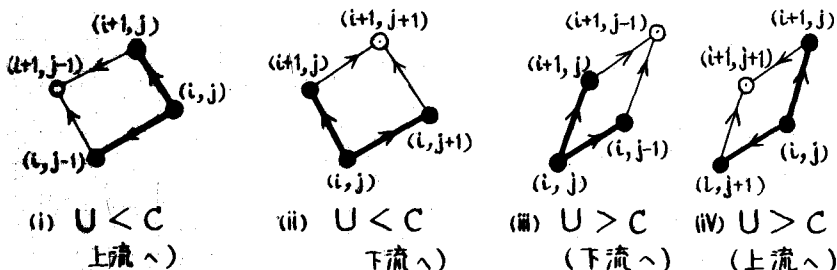


図-2 二つの既知曲線からの網目の計算方向

図-2は、 $X-T$ 平面における特性曲線の網目の計算方向を示したものである。しかし、上流へ進める場合も下流へ進める場合も算式は全く同じであって、ただ差分をとる方向が異なるだけである。

これらの網目において、[j] 曲線に沿ってとった差分と [i+1] 曲線に沿ってとった差分の和は、当然 [i] 曲線のそれと [j-1] 曲線のそれとの和に等しくなければならない。いま新たに差分記号 V を

$$d_{i+1} - d_i = d_{j-1} - d_j = V \quad \dots\dots\dots (31)$$

と定義し、 $d_{i+1}X = d_iX + VX$, $d_{j-1}X = d_jX + VX$, $d_{i+1}T = d_iT + VT$, $\dots\dots\dots$ etc とおくことにする。(図-2の(ii)および(iv)の場合は $j-1$ を $j+1$ に書き換える)

31式の V の記号を用いて、[i+1] 曲線および [j-1] 曲線に関する差分方程式 30, 30式を変形し、さらに既知の [i] 曲線および [j] 曲線上の関係式を代入すれば、

[i+1] に関して、

$$VX = \left\{ (d_{JU} + d_{JC}) + \frac{1}{2} (VU + VC) \right\} d_{iT} + \left\{ (U + C + d_{JU} + d_{JC}) + \frac{1}{2} (d_{iU} + d_{iC} + U + C) \right\} T \quad \dots\dots (32)$$

および $VU + 2mVC = \left[(d_{jY}) + \frac{1}{2} \left\{ (d_{jZ}) d_{iT} - (2K_f + K_a) \left(\frac{VU}{U} - \frac{d_{iU}d_{jU}}{U^2} \right) + (MK_f - K_a) \left(\frac{VC}{C} - \frac{d_{iC}d_{jC}}{C^2} \right) \right\} \right] d_{iT}$

$$+ \left[(Y_+) + (d_{jY_+}) + \frac{1}{2} \left\{ (Z_+) + (d_{jZ_+}) - (2K_f + K_a) \left(\frac{U}{U} + \frac{d_{iU}}{U} - \frac{d_{iU}d_{jU}}{U^2} \right) + (MK_f - K_a) \left(\frac{VC}{C} + \frac{d_{iC}}{C} - \frac{d_{iC}d_{jC}}{C^2} \right) \right\} \right] VT \quad \dots\dots (33)$$

[j-1] に関して、

$$VX = \left\{ (d_{iU} - d_{iC}) + \frac{1}{2} (VU - VC) \right\} d_{iT} + \left\{ (U - C + d_{iU} - d_{iC}) + \frac{1}{2} (d_{jU} - d_{jC} + VU - VC) \right\} VT \quad \dots\dots\dots (34)$$

$$VU - 2mVC = \left[(d_{iY_-}) + \frac{1}{2} \left\{ (d_{iZ_-}) d_{iT} - (2K_f - K_a) \left(\frac{VU}{U} - \frac{d_{iU}d_{jU}}{U^2} \right) + (MK_f + K_a) \left(\frac{VC}{C} - \frac{d_{iC}d_{jC}}{C^2} \right) \right\} \right] d_{iT}$$

$$+ \left[(Y_-) + (d_{iY_-}) + \frac{1}{2} \left\{ (Z_-) + d_{iZ_-} - (2K_f - K_a) \left(\frac{VU}{U} + \frac{d_{iU}}{U} - \frac{d_{iU}d_{jU}}{U^2} \right) + (MK_f + K_a) \left(\frac{VC}{C} + \frac{d_{iC}}{C} - \frac{d_{iC}d_{jC}}{C^2} \right) \right\} \right] VT \quad \dots\dots\dots (35)$$

が得られる。前項と同様に $V = V' + V''$ とおいて高次の微小項を省略すれば、

まず、32, 34式から VX を消去して、

$$\left. \begin{aligned} V'T &= \frac{d_{iT}d_{jT}}{2C} \left(\frac{d_{iU}}{d_{iT}} - \frac{d_{jU}}{d_{iT}} - \frac{d_{iC}}{d_{iT}} - \frac{d_{jC}}{d_{iT}} \right) \\ V''T &= \frac{1}{4C} \left[V'U (d_{jT} - d_{iT}) - V'C (d_{jT} + d_{iT}) + \{ (d_{jU} - d_{jC}) - (d_{iU} + d_{iC}) \} V'T \right] \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (36)$$

つぎに、(40), (41)式を加え合わせて、

$$\begin{aligned} V^0 U &= \frac{d_1 T d_3 T}{2} \left[\frac{(d_3 Y_+)}{d_3 T} + \frac{(d_1 Y_-)}{d_1 T} + \frac{1}{2} \left\{ \frac{(d_3 Z_+)}{d_3 T} \right\} \right] + \frac{1}{2} [(Y_+) + (Y_-) + \frac{1}{2} \{ (Z_+) + (Z_-) \}] V^0 T \\ V'' U &= \frac{1}{2} \left[\{ (Y_+) + (Y_-) + \frac{1}{2} (Z_+) + \frac{1}{2} (Z_-) \} V'' T + \{ (d_3 Y_+) + (d_1 Y_-) + \frac{1}{2} (d_3 Z_+) \} V' T \right] \\ &\quad - \frac{1}{4} \left[\left(\frac{VU}{U} - \frac{d_1 U d_3 U}{U^2} \right) \{ 2 K_f (d_1 T + d_3 T) + K_a (d_1 T - d_3 T) \} - \left(\frac{VC}{C} - \frac{d_1 C d_3 C}{C^2} \right) \{ M K_f (d_1 T + d_3 T) - K_a (d_1 T - d_3 T) \} \right. \\ &\quad \left. + \left\{ \left(2 \frac{d_1 U + d_3 U}{U} - M \frac{d_1 C + d_3 C}{C} \right) K_f + \left(\frac{d_1 U - d_3 U}{U} - \frac{d_1 C - d_3 C}{C} \right) K_a \right\} V' T \right] \end{aligned} \quad \dots\dots\dots (42)$$

さらに、(40), (41)式を差引いて、

$$\begin{aligned} V^0 C &= \frac{d_1 T d_3 T}{4m} \left[\frac{(d_3 Y_+)}{d_3 T} - \frac{(d_1 Y_-)}{d_1 T} + \frac{1}{2} \left\{ \frac{(d_3 Z_+)}{d_3 T} - \frac{(d_1 Z_-)}{d_1 T} \right\} \right] + \frac{1}{4m} [(Y_+) - (Y_-) + \frac{1}{2} \{ (Z_+) - (Z_-) \}] V^0 T \\ V'' C &= \frac{1}{4m} \left[\{ (Y_+) - (Y_-) + \frac{1}{2} (Z_+) - \frac{1}{2} (Z_-) \} V'' T + \{ (d_3 Y_+) - (d_1 Y_-) + \frac{1}{2} (d_3 Z_+) + \frac{1}{2} (d_1 Z_-) \} V' T \right] \\ &\quad - \frac{1}{8m} \left[\left(\frac{VU}{U} - \frac{d_1 U d_3 U}{U^2} \right) \{ 2 K_f (d_1 T - d_3 T) + K_a (d_1 T + d_3 T) \} - \left(\frac{VC}{C} - \frac{d_1 C d_3 C}{C^2} \right) \{ M K_f (d_1 T - d_3 T) - K_a (d_1 T + d_3 T) \} \right. \\ &\quad \left. + \left\{ \left(2 \frac{d_1 U - d_3 U}{U} - M \frac{d_1 C - d_3 C}{C} \right) K_f + \left(\frac{d_1 U + d_3 U}{U} - \frac{d_1 C + d_3 C}{C} \right) K_a \right\} V' T \right] \end{aligned} \quad \dots\dots\dots (43)$$

ここに、 $(Y_+) = I - K_f - K_a$, $(Y_-) = I - K_f + K_a$, $(Z_+) = \dot{I} - K_f \frac{\dot{N}}{N} - K_a \frac{\dot{E}}{E}$, $(Z_-) = \dot{I} - K_f \frac{\dot{N}}{N} + K_a \frac{\dot{E}}{E}$ であつて、

$$\left. \begin{aligned} (d_3 Y_+) &= (Z_+) d_3 T - \frac{d_3 U}{U} (2 K_f + K_a) + \frac{d_3 C}{C} (M K_f - K_a) \\ (d_1 Y_-) &= (Z_-) d_1 T - \frac{d_1 U}{U} (2 K_f + K_a) + \frac{d_1 C}{C} (M K_f - K_a) \\ (d_3 Z_+) &= \left\{ \ddot{I} - K_f \left(\frac{\ddot{N}}{N^2} - \frac{\dot{N}^2}{N} \right) - K_a \left(\frac{\ddot{E}}{E^2} - \frac{\dot{E}^2}{E} \right) \right\} (U - C) d_3 T - K_f \frac{\dot{N}}{N} \left(2 \frac{d_3 U}{U} - M \frac{d_3 C}{C} \right) - K_a \frac{\dot{E}}{E} \left(\frac{d_3 U}{U} + \frac{d_3 C}{C} \right) \\ (d_1 Z_-) &= \left\{ \ddot{I} - K_f \left(\frac{\ddot{N}}{N^2} - \frac{\dot{N}^2}{N} \right) + K_a \left(\frac{\ddot{E}}{E^2} - \frac{\dot{E}^2}{E} \right) \right\} (U + C) d_1 T - K_f \frac{\dot{N}}{N} \left(2 \frac{d_1 U}{U} - M \frac{d_1 C}{C} \right) - K_a \frac{\dot{E}}{E} \left(\frac{d_1 U}{U} + \frac{d_1 C}{C} \right) \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (44)$$

である。なおこれらはいずれも点 (i, j) における値である。

5. 常数 x_0 , t_0 , u_0 , c_0 の値

以上の算式によつて特性曲線網は順次計算されるわけであるが、これらは $4T^*$ と同程度以上と見られる微小項を省略して導かれたものである。そして、無次元化した変量 X , T , U および C はそれぞれ x_0 , t_0 , u_0 および c_0 を単位と考えた数値であるから、計算の対象となる問題における諸量の大きさが、これらの単位でどの程度の数値になるかを理解しておかねばならない。

時間単位 t_0 を一つの基準値にとり、これを波の半周期あるいは最高水深 h_{max} に達するまでの水位上昇時間を選ぶことにし、 S_0 は与えられた水路区間における最大勾配にとる。波速 c の t_0 時間における平均増加率を (σg) とおき、 h_{max} に対応する最大波速を c_{max} とおけば、 x_0 , u_0 , c_0 は(45)式から

$$c_0 = (S_0/\sigma) c_{max}, \quad x_0 = (S_0/\sigma) c_{max} t_0 = (S_0/\sigma^2) h_{max} \quad \dots\dots\dots (45)$$

となる。たとえば、 $\sigma = 10^{-4}$ ($t_0 = 1.5$ 時間, $h_{min} = 2$ 米, $h_{max} = 10$ 米) とするとき、 $\sigma = 1.04 \times 10^{-4}$ の程度の場合、最大水深に対応する波速の無次元量 c_{max} は ($10^{-4}/S_0$) の程度であり、

Froude 数が極端に大きくない限り、 U_{max} もこれよりか桁外れに大きくなることはない。無次元変量の最大値がこの程度とすれば、多くの場合 $4U$, $4C$ は $4T$ に対してかなり小さく考えられるから、上に示した算式はさらに省略可能な微小項を含んでいることになる。なお $\sigma = 10^{-4}$ なら、 $X = 1$ が $X = S_0 h_{max} \times 10^8$ に対応する。